

四

このときの八景探勝の足取りは、佐波淡齋の作にかかる「神奈川晚望」「金沢道中」「金沢総宜亭」の七律三首（『淡齋百律』⁴²所収）によって、おおよそのところが分かる。この三首をあわせよむと、いずれも同年の秋、仲間とつれだつて郊遊をこころみたとときの詠であることが分かる。

まず品川を発った一行は、暮れ方に神奈川宿に到着して一泊した。一夜の宿をかりた旅亭で、酒杯をかたむけつつ見たのが、神奈川沖の日没のながめだった。

「晩浦日沈帆影暗、秋天霜下雁声哀。晩浦日沈んで帆影暗く、秋天霜下雁声哀し。」（「神奈川の晩望」）

夕暮れの霜気にみちた海にうかぶ舟々の帆上をわたる雁の群——こういう秋天日没の海のながめは、内陸の桐生人である淡齋にとっては、めずしいものであったろう。二階の欄干によりかかって、じっと海門の漁り火と星々をながめいつている。

あくる朝、一行がむかっただのは程ヶ谷宿で、ここで昼飯の行厨^{べんどう}などをつかってから、金沢道を南にくだつて能見堂をめざしただろう。わずか四里の道のりである。ここは「八景は総て能見堂より云なり」⁴³といわれるほど、金沢八景探勝の第一歩となる眺望絶佳の場所であったから、一行はここで大いに浩然の気をやしなつたにちがいない。

ところで、「金沢道」は「かなざわみち」あるいは「かねさわみち」と読むようである。東海道五十三次程ヶ谷宿（現保土ヶ谷駅）の金沢横町から金沢藩の六浦陣屋（現金沢八景駅）にいたる道を指す。この道は「程ヶ谷→蒔田→弘明寺→上大岡→能見堂→金沢文庫・称名寺→瀬戸神社→金沢」という経路をたどり、金沢八景までゆくには、このルートを伝い歩くほかなかった。

「爰^{こゝ}にいたる道路は中里の二軒茶屋といふあたりより、段々に山中に分入小坂を登り、蹊路を経て十余町にして、能見堂の土地にいたる」⁴⁴

これは先にも引いた金沢道に関する一文であるが、このあたりの地形を知るのに、あおつらえむきの絵がある。歌川広重の『広重武相名所旅絵日記』⁴⁵第九景「金沢道山中より海辺眺望」の図である。これを見ると、当時、このあたりの道は山稜であったことが分かる。尾根伝いにゆくにつれ、目の前には金沢の海がひろがる。このように山上から万頃の海がのぞめるということもまた、内陸の人間・淡齋には物めずらしかつたであろう。ましてや、東臯心越禅師ゆかりの「擲筆山地蔵院・能見堂」という由緒正しい禅堂がひかえている。

「ある人いふ、この地より望めば、瀬戸の八勝までみな能く見ゆるゆゑに、能見道といふといへり」⁴⁶

というように、能見堂は八景の全貌を見わたすには絶好の地の利をえていた。吟杖をひいた一行は、ここで休息がてら八勝景を心ゆくまでながめてから、当夜の宿泊先の総宜楼をめざしたにちがいない。この宿は内川入江の海門にかかる瀬戸橋の西詰にあり、元禄のむかしから、「瀬戸秋月」として名高い場所に店をかまえているのである。おそらく一行の目的は、この景勝地で仲秋の名月を賞することだったのではないか。

淡齋の「金沢道中」「金沢総宜亭」の二首については、すでに本紀要第2号で少しく言及した⁴⁷。が、

通り一遍のものにすぎなかったので、ここであらためて吟味してみよう。そうすれば、江戸後期に流行したという「郊行漢詩」の百様のうち、少なくとも一様はうかがい知ることができよう。これを知ることはつまり、江戸知識人の異文化理解の一斑をのぞくことにもなる。鎖国時代の数少ない異文化の一つであった中国文化に対して、彼らはどのような態度でのぞんだか？ これを踏まえることは、今後のわれわれの異文化理解に貴重なヒントをあたえてくれるにちがいない。

まず「金沢道中」を、じっくり鑑賞してみよう――

経過窈窕又崎嶇
野趣村情無処無
能見堂中煮香菌
総宜楼上斫鮮鱸
風流畢竟為何物
好事応須属我徒
頼是同遊有工画
蕭閑写得六賢図

――七言律詩。韻字は上平声七虞(嶇、無、鱸、徒、図)。

文化三～十年の間の、いずれかの秋の作。おそらく文化三年の秋と推定される。

【訓読】

ようちよう 窈窕を経過すれば又た崎嶇
ま きく
野趣村情 処として無きは無し
ところ
のうけんどう こうきん
能見堂中 香菌を煮て
そうぎろう せんろ き
総宜楼上 鮮鱸を斫る
ひつきよう なにも物 た
風流は畢竟 何物為るか
まさ すべか
好事は応に 須らく我が徒に属すべし
さいわい こ たく
頼いに是れ 同遊に画に工みなるもの有り
しようかん
蕭閑 写し得たり 六賢の図

【詩意】

山間の奥ぶかいところを過ぎると、こんどはまた険しい山道で、
山野には山野らしい、村間には村間らしい情趣が、そこかしこに見られる。
能見堂では、香り高い椎茸を煮て食べ、
総宜楼では、活きのいい鱸を刺身にして食べる。
風流とはとどのつまり何なのか？
美しい風景はぜひともわれわれ風流の徒が堪能したいもの。
さいわいに同遊のものに画家がいて、
閑寂なところで、われら六賢相会の絵をえがいた。

さて、詩仏がくだんの「四時總亘之樓」^{しいじそうぎのろう}の書をあたえたのが文化三年(1806)春のことで、この詩をおさめる『淡齋百律』の出版が文化十年(1813)のことだから、「金沢道中」がこの間のいずれかの年に詠まれた作品であることはまちがいない。だいたい淡齋三十代半ばごろの作である。(わたしは文化三年の秋に、この八景探勝がこころみられたと考えるが、それについては追いつ追いつ述べることにしよう)

話が脇道にそれるが、中央の文人で最初に淡齋の詩才を発掘したのが、亀田鵬齋である。淡齋の第三詩集『菁莪堂集』(文化十二年刊)の鵬齋序にいう⁴⁸——享和元年(1801)、わたしが上毛を訪れたときのこと、桐生は絹でさかえる関東の一大都邑なのに、詩文を解するものは淡齋(当時三十歳)一人きりだった。その頃はまだ前時代の詩を作っていたが、その後、「都下の詩伯」と交流して、新時代の詩を作るようになった、と。

この鵬齋の序によると、淡齋はわずか数年の間に、江戸の詩伯に教えを乞うた結果、作詩の腕をめきめき上げていた。江戸の詩伯とは具体的にいうと、市河寛齋、大窪詩仏、菊池五山、柏木如亭など、江湖詩社の詩人たちで、彼らは当時最新の「清新性霊詩」を実作して、詩壇の脚光をあびていたところであった。地方詩人である淡齋も、鵬齋の仲介によって中央詩壇とつながりを持ち、新派の漢詩を作るようになったわけである。

先にも少しくふれたが、「清新性霊詩」とは、江戸詩壇の大立者・山本北山や市河寛齋たちが唱えたもので、清の袁枚^{えんばい}の主張した「性霊説」によるものであったが、それは元来、南宋の楊万里や明の袁宏道^{えんこうどう}の詩説から発展したものであった。卓犖不羈の詩人・袁枚は、なによりも個性を尊重し、人間の性情は自由に発露するときこそ霊妙な働きをすると主張した。詩風としては「清新軽俊」をかかげ、明の李攀竜^{りはんりゆう}や王世貞^{おうせい}らの古文辞派の流れをくむ清の沈徳潜^{しんとくせん}らの格調派に対して異をたてた。

このような詩説が長崎経由で鎖国下の日本にもつたわり、とくに江戸の山本北山がさがかけて、この「性霊説」によって、「古人の詩をまねるな、本当の詩を作れ」と唱えた⁴⁹。従前の服部南郭を代表とする、古文辞格調派の詩風のマンネリズムをしりぞけたのである。この古文辞格調派が宗としたのが、李攀竜の『唐詩選』に見られるような唐詩の模倣であったため、北山はそれを「擬唐詩」として排撃したのである。その先鋭さゆえに、北山の説はアルコールのように、当時の江戸詩壇に強い影響をあたえて、従来の護園派の詩風は鳴りをひそめた。

このアルコールの余瀝が、中央から地方の桐生にも飛び散って、淡齋も最新流行の「清新性霊詩」を作るようになったわけである。江戸と桐生の間は、だいたい徒歩で二日の距離であるから⁵⁰、江戸の流行はわずか数日で桐生に達することになる。こういう近距離だから、淡齋じしん、よく江戸におもむいたであろうし、また桐生・江戸間の詩筒の往来は頻繁であったろう。新詩説は江戸の詩伯の添削や口伝えによって——具体的に直接的に——淡齋に教えこまれたものと思われる。

文化十年(1813)のこと、淡齋はまた、郷里の桐生にも中国伝来の「清新性霊詩」を実践する機関として、翠屏吟社を設立した。そのために、わざわざ中央から山本北山門下の齋藤天籟(館海庵)を、顧問として呼びよせたほどである。天籟は「北山の三才」といわれた儒学者で、妻の雲章も北山門下の閨秀として名高い女性であった。招聘をうけた天籟は、妻とともども来桐して、この地に居をかまえた。結果、その年のうちに、翠屏吟社の詩人たちの小詞花集『桐生才子詩』(内題『翠屏吟社詩初編』)が刊行された。まさに打てばひびくような文学的成果であった⁵¹。この吟社結成によって、新時代の詩説が地方都市・桐

生にも定着するようになったと見ていい。

話をもどそう。

『淡斎百律』中において、「神奈川眺望」→「金沢道中」→「金沢総宜亭」というふうには、七言律詩が順序よく三首つづいているところから見ると、一行が江戸→神奈川→程土ヶ谷→能見堂→金沢という江戸郊外の経路をたどったことが分かる。この三首はいずれもいわゆる「郊行漢詩」であって、淡斎じしんも、当時流行のジャンルであることを意識して作詩したにちがいない。天下の奇勝である金沢八景探勝のときこそ、「郊行漢詩」の腕の見せどころではないか。もちろん、同遊のものにも同様の「郊行漢詩」があってもいいはずだが、管見のおよぶかぎり、その作を見たことがない。

申しおくれたが、同遊のものとは、本詩の末尾に、こういう自注が付されている。

「同遊者詩仏、緑陰、君鳳、百年、可庵、併予為六人。可庵善画。同遊の者は詩仏、緑陰、君鳳、百年、可庵、予と併せて六人為り。可庵は画を善くす」

詩仏とはもちろん大窪詩仏のこと、淡斎の師で、当時売り出し中の有名な漢詩人である。緑陰は山本緑陰、山本北山の子で、儒者である。君鳳は糸井榕齋、彼も北山門下の儒者。百年は漢詩人・木百年のことで、柏木如亭の高弟。可庵は喜多武清のことで、谷文晁一門の画人。こういう同じエコールに属する一行六人が、連れだって秋郊に出かけたわけである。同行の画家・喜多武清が六人相会の図をかいたとあるが、いうところの「六賢図」は伝存していない。少なくとも、わたしは見たことがない。

さて、まずは順番どおり、この詩の首聯から味読してみよう――

第一聯では、山道に難儀しながら金沢道の山趣村情を詠う。

○「窈窕」「崎嶇」は、陶淵明の「歸去來兮辞」に、こうある。

「既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘。既に窈窕として以て壑を尋ね、亦た崎嶇として丘を經。」⁵²

「金沢道中」はこの一聯を典故しているわけだが、「窈窕」は谷の奥深さをいい、「崎嶇」は山の陰しさをいう。一行は偉大な田園詩人の陶淵明と同じように、幽邃な谷間をくぐり、また険阻な山道を登り下りしたというのである。「又」という副詞があるから、金沢道が幽邃と険阻のくりかえしであったことが分かる。これによって、江戸時代の金沢道が山あり谷ありの変化に富んだ道であったことが知れよう。

言うまでもないことだが、田園詩の鼻祖である淵明の詩文を、淡斎も学んでいた。いや、淡斎にかぎらず、当時の文人のほとんどがその大半をそらんじていた、といっても過言ではない。江戸時代に必読のアンソロジー選集とされていた『文選』などのなかに、「歸去來兮辞」は学ぶべきものとして採録されていたので、小さい頃から、くりかえし素読することで骨髓に徹するほど記憶していた。

「かえりなん いざ 歸去來兮、まさ あ 田園 將に蕪れなんとす。なん 胡ぞ歸らざる。」

この種の帰農願望は陶淵明以来の伝統的メンタリティー心性で、その影響をうけた江戸の知識人たちにも共有されていた。官界で挫折したときや、あるいは隠退をよぎなくされたとき、彼らはよく「故山に歸臥す」という成句を口にしたものだ。もちろん、いまだ江戸時代のことであるから、「故山」のふもとには淵明が愛してやまない田園風景がひろがっていた。

○「野趣村情」とはあまり見かけない言葉である。が、「村情山趣」なら、まま見かける。たとえば、段成式の詩に、「鳥啄靈雛恋落暉、村情山趣頓忘機。」⁵³とある。

「野趣村情」と「村情山趣」では、音律上の違いはあるが、意味上の違いはあまりない。おそらく本詩においては、律詩の平仄上のルールから、一工夫して「野趣村情」が選ばれたのであろう。

○「無処無」——「無」という同じ字が一句のうち、一字をへだてて前後二度もつかわれている。近体詩においては、一首のうちに同字をくりかえすのは、本来はタブーである。しかし、本家本元の中国人の近体詩中にも、まま同字の反復をみかけるし⁵⁴、この詩のばあい、脚韻をふむ以上、「無」とするほかなかったもので、これはこれで許容範囲内と見るべきである。

つぎに頷聯について(律詩の規則として、ここは対句でなければならない)——

第二聯は金沢の名勝古跡で口腹の快樂にあずかったことを高らかに詠う。

○「能見堂」「総宜楼」

能見堂は金沢道の白眉といってもいい場所である。『江戸名所図絵』によると、「金沢称名寺の良の山上にありて、禪宗(洞家)の草庵なり。本尊の地藏菩薩は、恵心僧都の作にして一寸八分有りといふ。後世立像二尺五寸ばかりの地藏菩薩を作りて、霊像をばその胎中こめたりといふ。ゆゑに、この草庵を地藏院と号く。(いまの堂宇は近世久世和州侯源広之建立ありけるとぞ。「筆捨山」および「能見堂」など二つの額は、ともに心越禪師の筆なり)」⁵⁵

この堂が明の渡来僧・東皐心越禪師の巡錫によって有名になったことは、すでに何度かのべた。以来、多くの文人雅客がここをおとずれ、詩にもうたい絵にもかいた。しかし残念ながら、能見堂は明治の初年、火災による堂宇の焼失以来、再建されていない。禪師の書による二枚の扁額も烏有に帰した。また、現在は一帯が住宅地になっているので、往時をしのぶよすがもない。

ただ、前出の広重の『旅絵日記』第十景「能見堂筆捨松より八景一覽」⁵⁶が、昔時の能見堂一帯をよく写している。なるほど、このスケッチを見ると、ここからは金沢八景の全景を手にとるように望むことができるし、また、筆捨松から見た金沢八景がいちばん美しい、と評判だったことに対しても首肯できる。

この聯で「能見堂」と対をなしている「総宜楼」については、いままでにさんざん述べてきたことだし、これからもさんざん述べるであろうから、ここでは詳しくふれないが、総宜楼こと東屋は、瀬戸橋の西詰にある宿屋で、「瀬戸の秋月」を見るには絶好の場所にあった。「能見堂から瀬戸橋へは二十余町ありなん」⁵⁷というから、両者はつい目と鼻の先にあった。

○「香菌」^{しいたけ}「鮮鱸」^{すずき} どちらも秋が旬で、一行六人は能見堂では山の幸を賞味し、総宜楼では海の幸を堪能したことになる。このように、食味を詠じることは北宋の蘇東坡がよく試みたことだし、また江湖詩社の詩人の十八番であった。

椎茸は中国でも昔からさかんに食べられてきた食材であるのに、なぜだか詩文中にさほど用例を見ない。『漢語大詞典』でも、用例をたった二例しかあげていない。そのうち「齊文宣帝凌虚宴取香菌、以供品味。齊の文宣帝、凌虚宴にて香菌を取り、以て品味に供す。」(唐の馮贄の『雲仙雜記・凌虚宴』)というのを、ここに引いておこう。

いっぽうの鱸は、むかしから「尊羹鱸膾」^{ちようかん}の故事で有名である。晋の張翰は中央官界の要路者だったが、もともと羈束すべからざる性格で、秋風が吹くと、急に故郷の料理「^{じゆんさい}尊の羹と^{あつもの}鱸の膾」^{すずき}が恋しくなったので、さっさと官をすてて帰郷したという、あの話である。典故としては、『晋書』卷九十二「張翰

伝)や『世説新語』『識鑑第七]をあげるのが雅馴であろうが、ここではいっそ、『蒙求』の「張翰適意」⁵⁸をあげておこう。それというのも、幼い頃から『蒙求』という漢文入門書で叩きこまれた江戸の文人は、鱸と
いうと、この「張翰適意」をまっさきに思いうかべたにちがいないからである。(江戸や明治の文人も存外、
童蒙の書である『蒙求』を典拠としていたということ、作家の草森紳一が、どこかで指摘していた。)

つづいて頸聯について(律詩の規則として、ここも対句でなければならない)――

第三聯では、風流をもとめた結果、われとわが目で美景を見たことを詠う。

○「風流」は広義の風流韻事のことであろう。ここでは花鳥風月・賦詩飲酒を愛する美意識をいう。

○「風流畢竟」明の楊慎^{ようしん}の「題漁娃図」(『升菴集』卷三十四)に、「風流畢竟輸漁父、酔擁漁娃尽日眠。
風流は畢竟 漁父に輸し、酔いて漁娃を擁して 尽日眠る。」とある。

○「為何物」「為」は主語について、それがなんであるかを判断する動詞、「たり、なり」。「何物」は現代
中国語の「什么」にあたる。現代でも「問世情為何物? 世情とは何かを問う」というふうにつ
かわれる。

○「好事」『漢語大詞典』は「猶美景」としたうえで、元の潘從大^{はんじゆうだい}の「只今好事空見画。只今、好事は
空しく画に見るのみ」(「題水村図」)という例をあげている。

○「応須」「まさにすべからく〜べし」「応」と「須」(どちらも助動詞)は連用されることがある。ここでは
「ぜひとも〜したい」という希望・期待の辞。釈大典の『詩語解』⁵⁹卷之下に、「簾前春色応須惜。簾前
の春色まさにすべからく惜しむべし」⁶⁰とある。

最後に尾聯について――

第四聯では、谷文晁の高足で、南画家の喜多武清が、金沢道中に遊んだ一行六人の文人相会の図
を物したことを詠む。能見堂でかいたのか、総宜楼でかいたのかは不明だが、当時は晴れの場に仲間
が寄りあうと、集合写真をとるように群会図をえがくのが常であった。この場合、画賛をそえるのがしきたり
だから、書画吟咏のおの筆をとって想をねっていたにちがいない。

○「頼是」「頼」は「さいわいに」という副詞で、この副詞があることによって、「六賢図」をかくことは最初
から期待されていたことが分かる。「是」は副詞につく接尾語的な添え字。陸游の「除夕」(『劍南詩稿』卷
八十)に、「明朝頼是無來客、雪後泥深一尺強。明朝 頼いに是れ來客無し、雪後 泥深きこと 一
尺強。」

○「蕭閑」について、『漢語大詞典』は「亦作蕭閒。蕭洒悠閑;寂靜。」として、四つの用例をあげているが、
このなかから宋の林和靖の「蕭閑西水寺、駐錫莫忘歸。蕭閑たり 西水寺、錫を駐めて歸るを忘るる
なかれ」⁶¹を引いておこう。「閑寂な能見堂において」あるいは「閑静な総宜楼において」と解釈できるか
らである。(もともと、「ゆったりと垢ぬけた筆で絵をかいた」という解釈も捨てがたいが)

○「写得」の「得」は、動詞の後について動作の完了をしめす。しかし、ここでは単に完了をしめすのでは
なく、武清が「六賢図」を筆精墨妙にえがきおえたという感嘆をとまなうであろう。